

谷崎潤一郎と近代小説の条件：
歴史・演劇・翻訳の形態変換に関する総合的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2013-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7037

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 28日現在

機関番号：13801

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820031

研究課題名 谷崎潤一郎と近代小説の条件—歴史・演劇・翻訳の形態変換に関する総合的研究

研究課題名（英文） Junichiro Tanizaki and conditions of modern novel — A General Study on Transformation about History, Theatrics and Translation

研究代表者

中村 ともえ（NAKAMURA TOMOE）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：70580637

研究成果の概要（和文）：期間中に発表した成果は主に翻訳に関するものである。まず、谷崎潤一郎訳『源氏物語』（「谷崎源氏」）の本文異同を調査し、二度目の訳である「新訳」の改訂の実態を解明した。また、谷崎と与謝野晶子の源氏訳を比較検討し、作家による古典の現代語訳が独自の形態を備えた日本語を創出することを明らかにした。「谷崎源氏」と玉上琢弥の関係についても口頭発表を行い、現代語訳と古典研究の接点を探った。演劇に関しては、谷崎戯曲の書誌・上演情報のデータベース化を進め、一部を発表した。

研究成果の概要（英文）：In this period I mainly focused on the theme of translation. I started from study of the revised edition of Junichiro Tanizaki's second translation of "The Tale of Genji". In the second, I compared the translation of "The Tale of Genji" by Tanizaki and Akiko Yosano. These studies showed that the translation of the classic by novelist, creating a new style of Japanese. The third study is about the relationship between Takuya Tamagami and "The Tale of Genji" translated by Tanizaki. This study made clear a point of contact between translation and the study of classical literature. In addition to these studies, I started to make database of Tanizaki's drama. (Some of them are already published in the magazine.)

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	990,000	297,000	1,287,000
2011年度	750,000	225,000	975,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,740,000	522,000	2,262,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本近現代文学、近代小説、谷崎潤一郎、歴史、演劇、翻訳、現代語訳、形態変換

1. 研究開始当初の背景

私は谷崎潤一郎研究を基軸として、作品の詳細な記述分析と作品を取り巻く同時代の文学・文化に関する言説の分析を通じ、近代小説という概念を形成する諸条件の検討を

進めてきた（博士論文「谷崎潤一郎研究——近代小説の条件」2009年）。

その過程で、「形態変換」の現象に着目することによって、近代小説の形成のプロセスをジャンル相互の連関のもとに捉えなおす

という本研究の構想を得るに至った。ここでいう「形態変換」とは、作品に内在する要素や作品それ自体が、ある形態から別の形態へと移行する過程に生じる超領域的な現象のことである。

具体的には、谷崎潤一郎の活動を起点とし、(1)歴史小説における「偽書」の方法、(2)小説の劇化、(3)小説家による古典の現代語訳の3つの現象を検討対象とする。

このような形態変換の現象は、従来の文学研究では、純粋な創作に準じる二次的・付随的な現象として軽視されてきた。たとえば、谷崎の作品に関し、(2)小説の劇化や戯曲の上演など演劇との関係は、映画との関係に比べてもはるかに研究が立ちおけている。映画に関しては、谷崎自身映画制作に携わった時期があることから、彼の創作の一環とみなされてきた。一方、演劇に関しては、谷崎以外、また文学者以外の手によって上演されることが多く、その実態は解明されていない。また、(3)古典の現代語訳については、近年、谷崎の最初の『源氏物語』訳である「旧訳」において、不敬な箇所が削除・歪曲されている点に注目が集まり、戦中における古典受容のあり方を示す資料として周知されつつある。その一方で、長大なこともあって、訳文自体はいまだ検討の対象になっていない。

このような研究状況において、谷崎潤一郎の活動を起点に、形態変換の現象に照準する本研究の問題設定は有効であろう。形態変換の過程にこそ、各ジャンルに固有な性質はあらわれるはずである。それは、歴史的に成立した近代芸術の初ジャンルを所与のものとして自明化したときには見えなくなるものである。近代小説が形成されたプロセスを解明するためには、形態変換の現象に着目し、個別の事例に即しつつその理論的達成と歴史的意義を明らかにする本研究のアプローチが有効だと考える。

2. 研究の目的

谷崎潤一郎を主な対象に、(1)歴史・(2)演劇・(3)翻訳の3つのテーマによる検討を通じ、近代の言語芸術における形態変換の諸様相を明らかにするとともに、近代小説が隣接する諸領域との相互連関のうちに形成されたプロセスを解明することが、本研究の目的である。

具体的には、(1)小説と広義の歴史記述の間の形態変換、(2)文学が演劇という隣接する文化領域と結ぶ共生的・往還的な関係、また(3)翻訳を媒介とした文章の創出について、総合的かつ領域横断的な考察を進める。すなわち、(1)〈小説のフィクション学〉の構築：日本の近代小説を「フィクション学」というよりひろい見地から再検討すること

(2)〈領域横断の場としての演劇〉の研究：近現代の演劇を領域横断の場として捉えるための新たな方法論を構成すること

(3)翻訳を媒介とした〈文章〉の創発に関する研究：「作家の翻訳」が創出する近代日本語の様態を抽出すること

以上3点が本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)歴史・(2)演劇・(3)翻訳の3つのテーマに応じ、具体的には以下の方法で研究を進める。

(1)〈小説のフィクション学〉の構築：近代小説を「フィクション学」の見地から再検討する。

①大浦康介教授（文学理論・表象理論）を中心とする京都大学人文科学研究所の「虚構と擬制——総合的フィクション研究の試み」共同研究班と連携し、日本の近代小説を虚構論の見地から理論的に位置付ける。具体的には、谷崎の一連の歴史小説に見られる架空の古文書を引用する「偽書」の手法を、文学理論に照らして分析し、その理論的達成を明らかにする。

(2)〈領域横断の場としての演劇〉の研究：小説の劇化、戯曲とその上演など、演劇を領域横断の場として捉え、その様相を徹底した文献実証によって解明する。

①谷崎作品の上演に関する資料（筋書（パンフレット）、広告、演劇雑誌や新聞上の劇評、脚本など）を収集し、作品ごとの上演史のデータベース化を進める。作品ごとに整理することによって、時期や派の別を越えた上演史を描き出すことが可能となるはずである。

②上記資料のうち、活字化されていない文化資源である脚本を翻刻・紹介する。早稲田大学演劇博物館・松竹大谷図書館・国立劇場等には、谷崎の小説や戯曲をもとにするさまざまなヴァージョンの脚本が所蔵されている。これらを翻刻・紹介し、原作を離れて脚本間に結ばれる連関を解明する。

以上の文献調査を通じ、本研究では、文学と演劇の接点を明らかにするとともに、テキストと舞台の間にある脚色・演出の過程を顕在化・可視化し、演劇という場に生じる形態変換を論じる新たな方法論を提示する。

(3)翻訳を媒介とした〈文章〉の創発に関する研究：作家による古典の現代語訳が創出する日本語の様態を抽出する。

①三嶋潤子氏（京都学園大学非常勤講師）との共同研究によって、谷崎訳『源氏物語』（「谷崎源氏」）の本文異同を調査し、データベース化する。「谷崎源氏」には、「旧訳」・「新訳」・「新々訳」の三種類の訳文がある。これらの異同は多岐にわたり膨大であるため、範囲を制限し、分類を設けることで、整理を行う必

要がある。本研究では、二つ目の訳である「新訳」の改訂に着目し、共同作業によってその実態を調査する。調査結果は、分類し整理した上で、一覧を公表する。

②上記の共同研究の成果を踏まえ、李漢正氏（韓国、東国大学校文化芸術院日文学研究所専任研究員）と「谷崎源氏」に関する討議を行う。李氏とは、既に「旧訳」から「新訳」への改訳に関するデータベース構築に向けたフォーマット作成に着手している。さらに調査を進め、①・②の成果を総合し、国内外の研究者と討議を行う。

③また、「作家の翻訳」という観点で日本の近現代の翻訳文学を研究している井上健教授（比較文学・比較文化、翻訳論）と連携し、古典の現代語訳が異言語間の翻訳と取り結ぶ関係を考察する。谷崎以外の作家による古典の現代語訳も取り上げ、訳文を比較分析する。

4. 研究成果

(1)歴史・(2)演劇・(3)翻訳の3つのテーマのうち、期間中に発表した成果は主に(3)に関するものである。

(3)翻訳

①まず、谷崎潤一郎訳『源氏物語』の本文異同を三嶋潤子氏との共同研究によって調査し、二度目の訳である「新訳」の改訂の実態を解明した（下記5.の[雑誌論文]③、④、⑥）。その過程で、三嶋氏とともに、「新訳」の途中から口述筆記を担当し、中央公論社編集者として「新訳」の改訂、「新々訳」の成立に関与した伊吹和子氏にインタビューをすることができた。また、同じく中央公論社編集者の前田良知氏の協力を得て、現在、「新訳」改訂に関する資料の行方を探索している。引き続き調査を行う予定である。

②また、近現代における古典の現代語訳が異言語間の翻訳をモデルに行われてきたことを歴史的に跡付けるとともに、アーサー・ウェイリーの英訳に触発されて同時期に刊行された二つの『源氏物語』訳、谷崎の「旧訳」と与謝野晶子の「新新訳」の訳文を比較検討し、作家による古典の現代語訳が独自の形態を備えた日本語を創出していることを明らかにした（下記[図書]①）。本書は、「作家の翻訳」という観点で翻訳文学を研究している井上健氏による編著である。本研究は其中で、近現代の日本における翻訳文学の一端として、作家による古典の現代語訳を位置付けた点で意義がある。なお、井上健氏の著書『文豪の翻訳力 近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』（2011年）についても、谷崎潤一郎研究会のホームページに書評を掲載し紹介した。

③さらに、「谷崎源氏」と古典文学研究者で

ある玉上琢弥の関係について学会発表を行い、現代語訳と同時期の古典研究の成果が取り結ぶ接点を探った（下記[学会発表]①）。

「谷崎源氏」と玉上琢弥の接点に関しては、学会発表をもとに、現在論文化を進めている。

以上の成果は、日本近現代文学研究のみならず、比較文学・比較文化研究、古典文学研究の分野に向けても発信しており、今後の連携・展開を模索中である。なお、計画していた李漢正氏との討議は、李氏の勤務先の転任もあり期間中には実現に至らなかったが、今後も連携を深め、「谷崎源氏」の改訳の実態を調査していく予定である。

④また、森三千代による『和泉式部日記』の現代語訳と、和泉式部の和歌に取材した王朝小説『小説和泉式部』を対象に、昭和における古典復興の様相を考察する論考を投稿し、掲載決定済みである（下記[雑誌論文]①）。

今後は、谷崎訳『源氏物語』から与謝野晶子をはじめとする他の文学者による『源氏物語』訳へ、さらに作家による古典の現代語訳へと検討対象をひろげ、昭和における古典復興の思潮について考察を進めていきたいと考えている。

(2)演劇

①谷崎戯曲の書誌・上演情報のデータベース化を進め、その一端を雑誌発表した（下記[雑誌論文]②、⑤）。引き続き調査を行い、その成果を順次公開していく予定である。

②また、松竹大谷図書館が所蔵する谷崎の戯曲『お国と五平』の脚本を調査し、複数の異なるバージョンが存在することを突きとめた。この調査をもとに、現在、谷崎のみならず「小説家の戯曲」と一括しうる大正末期の小説家による戯曲制作の流行について、より包括的な検討・分析を行う論考を執筆中である。

(1)歴史

①横光利一の長篇小説『旅愁』を対象に、日中戦争開戦以前に新聞連載されていた冒頭部の本文が、開戦後に刊行された単行本で改稿されている点を踏まえ、小説と戦争の関係について考察する口頭発表を行った（下記[学会発表]②）。これは「第二次世界大戦下のパリで一横光利一、大澤壽人、藤田嗣治を中心に」というテーマによるシンポジウムの中の発表であり、音楽や美術など異なる分野の研究者と討議し、問題意識を共有することができた。『旅愁』については、近日中に口頭発表の概要を学会の月報にて発表する予定である。

このように期間中は、当初計画していた谷崎の歴史小説ではなく、別の対象を取り上げ、予定とは異なる角度から、小説と歴史記述の関係について考察を行うことになった。ただし、上記①の成果を踏まえることで、谷崎の小説についても、戦争にまつわる歴史記述が

同時代の小説にどのように影響したかを考察する視座が得られた。今後は、谷崎の歴史小説の研究に着手するとともに、小説と戦争にまつわる歴史記述の関係についても考察を進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①中村ともえ、森三千代の王朝小説——『小説和泉式部』と現代語訳『和泉式部日記』、奏、査読無、24号、2012年、掲載決定済

②中村ともえ、谷崎戯曲の解題(二)——『象』・『信西』、奏、査読無、23号、2011年、pp.161—167

③中村ともえ、〈谷崎源氏〉考(三)——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告(補)——、京都大学国文学論叢、査読有、26号、2011年、pp.35—37、<http://hdl.handle.net/2433/150452>

④中村ともえ・三嶋潤子、〈谷崎源氏〉考(二)——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告(二)——、京都大学国文学論叢、査読有、26号、2011年、pp.17—34、<http://hdl.handle.net/2433/150453>

⑤中村ともえ、谷崎戯曲の解題(一)——『誕生』、奏、査読無、22号、pp.132—142

⑥中村ともえ・三嶋潤子、〈谷崎源氏〉考(一)——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告——、京都大学国文学論叢、査読有、25号、2011年、pp.41—72、<http://hdl.handle.net/2433/141751>

[学会発表] (計2件)

①中村ともえ、谷崎源氏と玉上琢弥、静岡大学国語教育学会、2011年10月16日、静岡大学

②中村ともえ、横光利一——『旅愁』における〈パリの日本人〉、日本比較文学会、2011年10月15日、東京外国語大学

[図書] (計1件)

①中村ともえ、現代語訳の日本語——谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳——、井上健編『翻訳文学の視界 近代日本文学の変容と翻訳』、思文閣出版、2012年、pp.121—138

[その他]

ホームページ等

①書評、井上健『文豪の翻訳力 近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』(2011年、武田ランダムハウスジャパン)、谷崎潤一郎研究会ホームページ、

<http://blog.tanizakij.net/?eid=107#sequel>

②取材協力、食いしん坊 谷崎 細雪、読売新聞夕刊大阪本社版、2011年4月19日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 ともえ (NAKAMURA TOMOE)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：70580637

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：